

「ティムが得たことは、ティムが持ち寄ったものへの反映だ」

十週間は矢のように過ぎた。

ティムは帰国した。

ティムを私は見送った。

彼の私への旅は終わった。新しい彼の旅立ち。

私の50年にわたるテキスタイルデザインの軌跡が終焉に近付こうとする今、ティムとの遭遇があった。

ティムは出発したばかりの若い星だ。

彼が私の軌跡の中に近付いたことで、彼の軌跡がどう変わったのか、彼の早さがどう変貌を遂げるのか。私には予想は経たない。

旅立ったばかりの彼にとって、私との遭遇は、どう影響したのだろう。

今回の私にとっての問題は、結論を強いることでは無かった。

私は、ただ問題を投げかけたにすぎない。私の今月までの出来上がった仕事をいくつか見せた。ほんの数パーセントだった。

その中で、何がティムの心に残り、何がかれの作品に、どう反映するのか、すぐに結論は出ないだろう。私が用意していたものは、私の持っている全てであって十週間という短い期間に、ティムがそこから何を引き出したか。

デジタルの録音機も新調してティムに預けた。何時間分となるか、何枚かのMDをかれは持ち帰った。その記録の糸を頼って、彼の記憶を作品の上に蘇らせることができるか、それが作品の血肉となり得るか、どうか、それがいつの日になるかは判らない。

私は、私の現在の仕事の途上にある工場への旅にも彼を誘った。つまり、そこは私の最前線だ。そこでやろうとしていることは、世界のテキスタイル・インダストリーにとって、最も重要なテーマであり、素材開発の途中経過の真っ最中であった。

私はその現場にティムを立ち合わせることをした。これが私の為し得る最上の方法であるとの確信の上でのことだ。

あと一つ。私の友人たち、仲間たち、彼自身が見いだした親しい友たちとの交流があった。その輪が広がっていくのを私は見た。好ましいことと思った。

未来はこの輪の中に拓けていくだろう。

ティムが、この旅から何を得て帰ったか。

ティム自身が、今月まで精進して持ち帰ったものが。この十週間の私。

私の友人。ティムの友人たちと交流することで、どう収穫のための肥やしとなったか、私は、それを見届けたいものと思う。

出来得る限りの私の勤めは果たした。

私の終焉に近い仕事を、彼は見たり、聴いたり、少しは試しても見た。
彼は謙虚で、私の仕事ぶりを乱しはしなかった。
彼はあらゆる面で、人から好かれ、そのことで幸運な旅の収穫を得たにちがいない。

2003年9月

新井淳一